

この旅で二度目になる康定に向うバスに揺られながら、私の心は嬉しさで踊っていた。いよいよ本格的に旅の第二部が始まるのだ。バスは懐かしい思い出の土地に向かって走り始めていた...

帰国する母たち一行と別れ、一人居残りを決意したのは、もっと深く四川省チベット圏の人々やその生活と触れ合いたいと思ったからだ。訪れる場所はチベット圏ならばどこでも良かったのだが、旅の目的地は居残りを決意した時から既に心に決めていた。

三年前に訪れた四川省チベット圏の「カム東部」と呼ばれる地方の街や村を、あの時には後ろ髪を惹かれる思いで駆け抜けた場所を、もう一度自分の足でじっくりと歩いてみたかった。未だ訪れた事の無い街や村に行ってみたくも強くあったが、一度は訪れた土地であっても、人に連れられバスで走り抜けただけの旅ではその土地の本当の姿は見えてはこない。心を強く揺さぶられはしたが、私は前回の旅にまだ納得していなかったのだ。

そしてもうひとつ私が三年前の旅にこだわっていたのは、深く心に残っていた場所があったからだ。ずっと私の心の奥に沈んでいた、宝石のように美しい湖が夢ではなかった事を、再びあの場所に訪れて確かめたかった。

成都から康定を結ぶこの道をバスで通るのは既に四度目だ。三年前の旅の往復と、今回の四姑娘山麓をめぐる旅での帰り道もこの道路を通過して成都まで戻った。今では窓の外を流れる風景もところどころに見覚えがあり、一人旅の喜びで心が躍っている私には、風景までが「おかえり！とうとう一人で帰って来たんだね」と迎えてくれる旧友のように感じられていた。

嬉しくて嬉しくて、一人で車窓を眺める顔もつい笑顔になってしまう。他人が見たら、ちょっと頭のネジが緩んでいるように見えたに違いない。

途中立ち寄った休憩所の脇ではドラム缶のなかでトウモロコシを焼いていた。

「あ～！ 懐かしい！」

三年前に始めてこの道を通った時にも食べたっけ。

その時のバスには、こちらの土地出身で、案内役として私たちの旅に同行していた鳥里鳥沙^{ウリウサ}氏の親戚筋にあたるという少女たちが数人同乗していた。途中の小休止でバスを降りたあの時にも、このドラム缶の焼きトウモロコシが売っていたのだ。

小銭を持っていなかった私が紙幣を差し出すと、売り子さんは困ったような顔をするばかりで売ってくれようとしなかった。お釣りが無いのかと諦めようとした時、バスに同乗していた少女の一人が自分の一元硬貨を取り出すと、私にトウモロコシを買ってくれたのだ。

まだ幼さの残る彼女の年齢は、おそらく中学生くらいだっただろう。バスに戻ると急いで日本人の同行者から一元借りて返そうとしたのだが、彼女はどうしても受け取ってくれず、私はトウモロコシを食べながら恥ずかしくてたまらなかった....。



懐かしさもあり、飛びつくようにしてドラム缶の中で灰まみれになっている焼きトウモロコシを買う。聞いた話ではこの辺りで作られているトウモロコシは、食用というよりは家畜の餌となっているのだそうで、それはまるで石のように硬いのだが、噛み締めるとこれが本来のトウモロコシなのだろうと思える素朴な味わいで、私にはとても美味しい。トウモロコシをかじりながらこの道をバスに揺られていると、三年前の旅の思い出が次々に蘇ってきた。

この道で初めて入った街道沿いの公衆トイレ.....

それは、それなりにアジアの国々を渡り歩き、それなりに中国のトイレについての噂を聞き及んでいた私でも思わずカルチャー・ショックを受けてしまうほどに衝撃的だった。もうヤケクソにならないければ入る勇気も湧いて来ないような感じだったが、そういえば今回の旅ではそんなトイレには一度も出会っていない。ここ数年飛び鳥を落す勢いで発展している中国は、どうやら地方の僻村のトイレ事情にまで急速に文明の波が押し寄せているようなのだ。それはこの土地を旅する旅行者としては、快適に旅の日々を過ごせるという喜ばしい事柄ではあるのだが、その土地の本来の姿が急速に失われつつあるという一事例を示されてもいるようで、私としてはかすかな焦りも感じてしまうのだ。

心の中で暖めていた思い出の土地は、あの時の姿をそのまま留めているのだろうか.... 喜びで弾んでいた心にフッと一瞬、不安の影がよぎる。

当時はまだ道路事情が悪く10時間以上もかかった道のりが、三年の間に驚くほど改善され、バスはスイスイと7時間ほどで康定に到着した。

バスを降りると先ずチケット売り場に向かい、明日の目的地である理塘までのチケットを買った。出発時間は翌朝の6時半だ。

チケットを買い終えたら、次は今日の宿探した。大きなザックを担いだ一人旅ではこれが面倒なのだ。成都からチベットエリアへの中継点となる康定では、バス・ターミナルの周りにも「住宿」と書かれた看板がたくさん出ている宿を探すのは難しくなさそうだったが、実際、思った以上に簡単に済んでしまった。適当に当たってみようと一歩バス・ターミナルを出たところで、いきなり宿の客引きに囲まれてしまったのだ。

「小姐！今日の宿は決まってるの！？ 良い部屋あるわよ！ 目の前よ！」

客引きというとちょっと胡散臭いイメージがあり、いつもだったら避けてしまいがちなのだが、真っ先に声をかけて来たチベット人のお姉さんはキリッとしたしっかり者といった感じで、何の根拠もないが信用できそうな気がした。重い荷物を担いで部屋探しをするのが面倒だった事もあり、私は彼女の話聞いて見る気になったのだ。

宿は道路を挟んだ斜め向かいのビルの3階でバス・ターミナルの目の前だった。彼女について行くと、その宿が入っている5階建ての小さなビルは、1階が飲食店になっている他は各階にそれぞれ別の経営の安宿が詰まっていた。バス・ターミナルの入り口に集っていた客引き達は、結局みんなこのビル辺りからやって来ていたのに違いない。きっと何処の宿も設備は似たりよったりなのだろう。

一番安いという30元の部屋には窓は無く、セミダブルのベッドとTVの置いてあるサイドボードでいっぱい、いっぱいという感じだったが清潔そうで悪くはなかった。何処の部屋に泊まってもトイレとシャワーは共同だが、どちらもまあまあ清潔で、24時間使えるというシャワーも熱いお湯がまあまあ湯量で出るようだったし、私にとっては十分だ。どうせ今日一晩眠るだけの部屋なのだ。迷わず一番安い部屋に決めて荷物を下ろした。

うわ〜い。ベッドの上で伸びをする。今夜の宿もアッサリと決まって何もかも順調だ。荷物を置いたらすぐ街に出た。

四姑娘山メンバーと旅の最後を過ごしてから、ほぼ十日ぶりの康定だ。あの時には皆と一緒に過ごしたこの街に、帰りの航空券を捨てて一人で戻って来ているなんて！そんな予想外の展開が愉快で思わず笑ってしまう。スキップしたいような気分で街の中を歩き回り、あちこちの雑貨屋やスーパーに立ち寄っては今後の旅に役立ちそうな物を買って回った。

ティッシュ、爪切り、日焼け止めの入ったリップクリーム、クッキー、果物ナイフ、明日のバスの中で食べる果物…。それは必要にせまられての買い物というよりは、なにか少しでもこの街と関わりを持ちたい、そんな私の気持ちの為の買い物であるような感じだったのだが。

それにしても康定の街並みは、三年の間にずいぶん様変わりしていた。記憶の中にある古い建物は見当たらず、表通りには見覚えのない、明るく清潔なショーウィンドーの近代的な店が数多く立ち並んでいる。庶民的な食べ物屋や公衆トイレなどが集っていた街の一角は姿を消し、二階建てのショッピングモールが建てられていた。予期していたことではあったが、そんな街の変化は私には寂しく感じられた。止められない時代の流れは、やはり確実に山岳地帯の小さな街にも迫ってきているのだ。

康定はそれ程大きな街でもないので勢いづいてきた私がガンガン歩くと、二時間程でおおむね歩き終わってしまった。少し歩き疲れてベンチに座りアイスキャンディーを舐めていると、隣に小学生くらいの女の子の二人連れがやってきて腰掛けた。

一人の子はたった今、買って来たばかりらしいビニールに包まれたリュックサックを膝の上に乗せていた。女の子はそれを手に入れたことが嬉しくてたまらないらしく、リュックを見る目を輝かせ、手で撫でながら夢中で話をしていた。私は二人の様子を見ながら少し新鮮な気持ちだった。身近に子供がないので詳しい事はわからないが、今の日本で子供達はリュックサックを買って貰って、こんなにうれしそうな顔をするのだろうか…。なんだかその子供達がとても可愛く思えて、何か喋ってみたいくなった私は、持っていたウエストバックの中から折り紙を取り出した。「外国に行く時は折り紙を持っていくといいよ」。海外旅行に行き始めた頃の私に母が教えてくれた事だ。折り紙は日本の文化と伝統を伝え持つ美しい遊びであるし、この遊びを知らない外国人には、一枚の紙が折られる事のみで立体的な物の形が作られていく事に、まるで手品を見るような驚きを感じるらしく、皆が興味を持ってくれる。

たとえ言葉が通じなくても、折り紙さえあれば気軽に土地の人と交流するきっかけを作ることができるので、私は海外に行く時にはいつも必ずバックの中に入れておくのだ。

取り出した折り紙で、得意のユリの花を折ってみた。いつもだったらこちらから積極的に働きかけなくても、折り紙を取り出した時点で相手の方が、何が始まるのかと息をつめて見つめてくれている事が多いのだが、少女達はリュックサックに夢中で隣席の外国人には気づいてもいないようだった。二人があまり一生懸命話しているのが邪魔をするのも悪いような気になった私は、折り紙の花を手を持ったまま立ち上がり、散歩を続ける事にした。

しばらく行くと寺院があった。僧侶が中から出てきたので、入っても良いか確かめ足を踏み入れる。境内では小坊主達が勉強していた。本殿に入るとチベット仏教の美しい仏像が私を見下ろしていた。思わずハッとして反射的に頭を下げる。

「神様… 私をこの土地に再び訪れる機会を与えて下さって有難うございます。どうか今後の旅の安全をお守り下さい…」 私は特に信心深い人間ではないのだが、素直にこんな気持ちが込み上げて来た。ひざまずき、頭を床につけてお祈りをすると、それまで手にしていた折り紙の花を祭壇に置いた。(続く)